

合唱曲「みなまた」

海

a. 春の海（徳富蘆花「春の海」『自然と人生』より）

春の海溶々として漾々たり。

或所は大なる蝸牛の這ひたる跡の様に滑りて白く光り、或所は億萬の鱗俗ざわめく様に青く顫へり。磯近き水は透明にして明礬色を帯び、圓き石個々紫の影を待して水中に横はり、茶褐色の藻は梳りたる髪のごとく磯岩を纏う。

b. 故郷の（徳富蘆花「夏の興」『自然と人生』より）

故郷の姉の家は、不知火燃ふる海邊にありて、天草に近く、大小の島勝手に横はり、水は深けれど碧玉の如くに澄みて、島々の間を回り、川となり、湖をなし、悠々として水も宛ながら游べる様なり。

c. 不知火の事（本居宣長『古事記伝』神代三之巻）

此火の事、國人の説に云、年毎の七月の末より、八月ごろまで見ゆるうちに、八月朔日の夜は殊に多し、そのさま世に挑燈と云物の大さに見ゆる火、初には一二あらはれて其やうやくに分かれて、数多くなりゆきて、さかりなるほどは、幾千萬ともしられず、大かた海上豎横三四里がほど、おしなべてみな火になるなり。

さて其火のもゆる時に、其海を往来船を、遠く見渡せば、火中を行と見ゆるを、船にてはさらに火見ゆることなく、ただつねの如くなりとぞ。

浜の唄

a. 田植唄（日本民謡大観・九州篇〔南部〕田植唄〔十三〕水俣市浜）

〔甲〕五月あ田植えて ナー 田の	〔乙〕八 田の草とりて ごしょの ナ
〔甲〕納めにゃ胸とけぬ ナー	〔乙〕八 ヨカバイ ヨカバイ
〔甲〕腰の痛さよ ナー せま	〔乙〕八 せまぢの長さ 四月 ナ
〔甲〕五月の日のながさ ナー	〔乙〕八 チャカチャカ ウエロイ

b. 蕨採唄（日本民謡大観 山行唄〔八〕水俣市浜）

ハー わらべ ナー 取りゃろば ア 迫ざこさるき
ハ ソケンモオエトル コケンモオエトル
尾羽根とんぎゅうは オハラ 瘦せわらべ ハ アーワガイマネ
ハー 瘦せた ナー わらべは ア 焼野に育つ
ハ ソケンモオエトル コケンモオエトル
雨に叩かれ オハラ 日に干され ハ アーワガイマネ

c. 子守唄（日本民謡大観 子守唄〔九〕水俣市浜）

おろろんころろん おろろんが守りにゃ 守にゃ雇わぬ 気にゃいらぬ
二月二日が 早よ来たなれば 荷物ひっかけて 下駄さげて

d. 初摺唄（日本民謡大観 摺白唄〔十〕水俣市浜）

ここは古賀ン塘も ナーヨー 越ゆ ヨカバイ
越ゆれば 田ン中 ンヤーエイエーエ

田ン中越ゆ ヨカバイ ハ 越ゆれば塩の
ア 塩の浜 ハーヨカバイ ヨカバイ
塩の浜から ナーヨー 丸 ヨカバイ
丸島見れば ンヤーエイエーエ
七里波 ヨカバイ ハ 波打つ波の
ア 波の音 ハーヨカバイ ヨカバイ

淵上毛銭の四つの詩

a. 散策（淵上毛銭全集より）

海は / はてしもなかった。
なんといふ名の / 魚であるのか、
椿の花の咲いた / 石崖の下に、
夕日を浴び / 眼をひらいたまま、
ちやうど / 僕のやうに死んでみた。

b. 無門（淵上毛銭全集より）

風は、 / きらひといふものが / ないのだらう。
道も / 持ってゐないくせに、 / 何処へでも行き、 / なんにでも触れて。
行つてしまつたあとは、 / 月がさしたり、 / 雨が降ったり、 / 人間が泣いたりもする。
風はなにやら / ぼかんとした、 / 瘦せつぼちの / 僕なんかを、 / 知りもしまい。
花が散って、 / 垣の外ではこどもが、
あんたが家は何処さ、 / 肥後さ、 / 肥後の何処さと、 / うたつてみた。

c. 河童〔がらつぱ〕（淵上毛銭全集より）

河童がおるち うそじやろない / おらじやま おつとたい
去年も誰^{だっ}てるさんが / がらつぱに尻かかじられて / うんぶくれたがね
がらつぱに皿の あるちゆうか / ほんじやろか ほんたい
わらび野の健三どんな いつじやいる / がらつぱの皿ば / 拾たちぞ
がらつぱ がらつぱ 聞こえんとか / あんたの皿ば くれんかな
たつた一枚で よかつじやが / くるれば来年からは / 石しやくらせん

d. 約束（淵上毛銭全集より）

今日も / 夕まで / なにごともなく / 生きた
この分では / 明日という日は / たしかに / 約束されてゐる
いま / 私は静かに待つてゐる
静かに / 待っている者には / きっと / 約束は果たされる